

地方出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

12 地方紙・関連出版社共同出版

『限界集落と地域再生』

山村崩壊は防げるか ——— □□□

文・足羽 潔

2008年11月、高知新聞社など全国12地方紙・関連出版社が「限界集落と地方再生」(大野晃著)を一斉に発売する。12社それぞれの出版だが、表紙デザインも内容もすべて同じ、異なるのは社名と奥付、帯の文章という異例の「共同出版」だ。

65歳以上が集落の半分

「限界集落」は65歳以上の高齢者が集落生活者の半分以上を占め、次第に冠婚葬祭、年中行事、田役、道役など社会的な共同生活の維持が困難になっていく集落を指す。限界集落の光景は「一人暮らしの老人が1日だれとも口をきかず、みのもんたの番組を相手に、夕暮れを待つ。わずかな年金に頼り、バス路線が廃止されたためタクシーで病院に通う」。「限界集落」はやがて「消滅集落」への歩みを早める。高度経済成長のひずみである過疎問題。いつの間にか声高に叫ばれることもなくなり、「田舎暮らし」や「環境の時代」、あるいは「地方分権」という言葉にその悲惨さが覆い隠されてしまった。しかし、現実の過疎山村の姿は「限界集落」という言葉が似合うほどに追い詰められている。

「限界集落」の言葉をつくりだしたのは長野大学教授の大野晃氏。大野氏は高知大学教授当時、中山間集落の現地調査を続け、膨大な資料を分析して山村の悲痛な叫びを「限界集落」と定義づけた。1988年のことだ。「限界集落」は何をもたらすのか。「むら」の力の喪失は森林の荒廃を招き、山は保水力を



『限界集落と地域再生』はA5判・全312頁、本体1600円+税

失い、川は鉄砲水を出し、下流域は洪水を、あるいは渇水を招く。ご存じだろうか。「枝打ちや間伐の行われていない杉は種保存の本能から多数の花粉を付ける。きれいに枝打ちされた杉はすくすく年輪を重ねる。山の荒廃と杉花粉症患者の増大は軌を一にする」——山の防人の解説だ。

全国に7878集落

国土交通省が2006年に行った調査では、全国で限界集落が7878集落、うち消滅の恐れのある集落は2641集落に上ることが明らかになった。1990年代に西日本から広がり始めた「限界集落」問題は2000年ごろから東日本へ拡大。そして全国

に共通する課題になる。地方紙、全国紙を問わず「限界集落」が取り上げられ、2007年夏の参議院選挙では朝日新聞に「小沢氏が限界集落行脚」の見出しが躍った。「地方紙が共同出版できるテーマでは」と考え、高知新聞の記者時代から知己を得ていた私が大野教授に書き下ろしによる出版意向打診したのはこのころだった。同時に秋の全国新聞社出版協議会の席上で共同出版の呼び掛けを行ったが、大野教授はNHK教育テレビの「視点・論点」、テレ朝のサンデーモーニング特集番組出演などさらに露出度を増していた。

最終的に共同出版に参加したのは北海道新聞社、デーリー東北新聞社、秋田魁新報社、河北新報出版センター、新潟日報事業社、信濃毎日新聞社、静岡新聞社、京都新聞出版センター、徳島新聞社、長崎新聞社、南日本新聞社、高知新聞社。出版責任者が08年1月21日、信濃毎日新聞社で企画編集会議を開いた。12地方紙・関連出版社が企画段階から共同出版に挑むのは異例。各社がそれぞれ出版するスタイルを取るものの、12社合わせて初版は18000部。印刷会社も入札によって決定したが、当然、入札価格は12社にとってメリットのあるものになった。

「わが町」「わが村」の近未来

本書は全6章で構成。限界集落の実態、全国的拡大を論じながら、第4章「限界集落はいま～日本列島に行く」では鹿児島、長崎、高知、滋賀、静岡、長野、新潟、秋田、北海道のルポを通し、限界集落問題の実相に迫る。

秋田では小学校の子どもたちが限界集落の調査を行っている様子を紹介。子どもたちに機会を与えた先生は「中央、地方を問わず幸福に暮らすことができるようであれば、それを不可能

にしている施策や政治経済システムにこそ「限界」があると断言せざるを得ない」と問題の核心をつく。

さらに第6章では、1960年から2000年までの人口動態と、2000年から2030年の人口動態予測をベースに、2030年の「限界自治体」を予測する。予測は都道府県に加え、全国のすべての市町村(2000年時の市町村名)で行っている。読者には「わが町」「わが村」の近未来の姿を教え、同時に行政の政策展開の資料的価値を

十分に持つものとなっている。「小沢氏が限界集落行脚」の際の参院選挙結果は自民の牙城・地方一人区で自民が惨敗するというまさに疲弊した地方の民意を反映した結果を生じさせた。その疲弊の象徴に限界集落がある。大野氏は再生の視点として、森林環境保全交付金制度の創設や山と川と海の連携を重視した流域共同管理の充実などを訴える。「限界集落」の進行を食い止めることができるかどうか、日本の農林漁業政策、国土政策の大きな転換点

にあると指摘する。

過疎問題を「限界集落」というハードなキーワードで教える本書はぜひ、「増刷」の声がかかる売れ行きにしたいと思っている。なお、この本の装丁は倉橋由美子さんの実弟・倉橋三郎さん(倉橋三郎ブックデザイン室)にお願いした。

(あしわ きよし/高知新聞企業文化出版局次長、全国新聞社出版協議会代表幹事)

新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

『平壤からの手紙 —札幌の拉致被害者 石岡亨の軌跡』 ●棟方周一著



麻生内閣は北朝鮮の拉致被害者問題をどのように考えているのだろうか。1980年、ウィーンで旅行中だった石岡亨さん(当時22歳)がよど号犯の妻たちによって北に拉致された。98年にポーランド消印の手紙が消息不明だった息子から札幌の石岡家に突然届き、家族は事実を知らされる。石岡さんの友人である著者はこの問題が風化させられてしまう危機感を抱き、本書を執筆。78年

から二年の間に届いた手紙を中心に彼の心の軌跡を辿り、また行政の対応にも疑問を呈す。家族や友人の間だけで終わらせてはいけない問題を示し、“石岡亨がこの本を手にする日が近いことを願う”という著者の熱い思いが伝わる渾身のドキュメント。

◆1575円・四六判・187頁・寿郎社・北海道・2008/8刊・ISBN978-4-902269-28-4

『PHOTOGRAPH』 ●高松次郎著



高松次郎による『写真の写真』シリーズ』は1972年に制作され、1973年にサンパウロビエンナーレにて発表された。発表当時は50点以上あり、展覧会ごとに選定・構成していた。

本書はその内の49点を掲載。被写体は主に高松家のファミリーアルバムから選ばれたごくごく日常的な写真。折り曲げられたり、強い光にさらされたりとイメージが見づらくなり、写真として

の体をなさなくなっている。モノとしての写真を撮った写真。その写真もまたモノ。「写真内写真」はメタな入れ子構造で撮り、撮られること、そして写真とは何かを問いかける。ただ、なぜかモノを撮った写真でも郷愁を感じてしまう。

◆2940円・A5判・120頁・赤々舎・東京・2008/9刊・ISBN978-4-903545-31-8

『アーリイモダンの夢』 ●渡辺京二著



西洋が世界支配を実現した19世紀後半からをモダンとすれば、それ以前の資本主義の勃興・成り立ちを「アーリイモダン」というそうで、本書にとってのキーワードとなっている。第I部では、このアーリイモダンに属するという江戸時代を「近代世界システム」という概念を使って分析してみせる。するとこんな見方もできるのかと、目からウロコで、思わず感心させられる。さらに、

横井小楠、イリイチ、ラフカディオ・ハーン、サイード、宮崎滔天、夏目漱石など多才な人物を俎上に載せる。圧巻は、日本文学の粹に収まりきらない石牟礼道子の生い立ちからの半生をえがき、近代の正体を明らかにしていく彼女の数々の作品の成立を論じた第II部であろう。

◆2520円・四六判・283頁・弦書房・福岡・2008/8刊・ISBN978-4-86329-005-1

売行良好書

期間：2008年9月16日～10月15日

[出荷センター扱い] ※税込み価格

- (1)『ゆりちかへ』1365円・書肆侃侃房 (2)『作っておくと、便利なおかず』1260円・ベターホーム出版局 (3)『かつら文庫の50年』1000円・東京子ども図書館
- (4)『浅田家』2730円・赤々舎 (5)『「本の雑誌」炎の営業日誌』1680円・無明舎出版 (6)『どんぐりの図鑑 フィールド版』1050円・トンボ出版 (7)『みんな、同じ屋根の下』1890円・行路社 (8)『水に舞う不死鳥』1575円・弦書房
- (9)『機能不全家族』1600円・アートヴィレッジ (10)『鉄腕稲尾の遺言』1680円・弦書房 (11)『自然農・栽培の手引き』2100円・南方新社 (12)『嗅覚ディスプレイ』3570円・フレグランスジャーナル社 (13)『定本 納棺夫日記』1575円・桂書房



[三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書] ※税込み価格

- (1)『東京かわら版 10月号』420円・東京かわら版 (2)『酒とつまみ 11号』400円・酒とつまみ社 (3)『夜想 特集ヴィクトリアン』1575円・ステュディオ・パラボリカ (4)『歩いて知る浅井氏の興亡』1890円・サンライズ出版 (5)『続・群馬の古城』1890円・あかぎ出版 (6)『モツ煮狂い 第2集』504円・平成鳥有堂 (7)『唐沢俊一文筆業サバイバル塾V o 1. 4』525円・出版評論社 (8)『S P I N 04』1050円・みずのわ出版 (9)『唐沢俊一文筆業サバイバル塾V o 1. 1・2 合本号』1050円・出版評論社 (10)『鉄腕稲尾の遺言』1680円・弦書房

[ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書] ※センター出荷データより/税込み価格

- (1)『酒とつまみ 第11号』400円・大竹編集企画事務所 (2)『酒とつまみ 第10号』400円・大竹編集企画事務所 (3)『nobody ISSUE 28』945円・nobody編集部 (4)『東京かわら版 No. 417』420円・東京かわら版 (5)『最後の「ああでもなくこうでもなく」』2310円・マドラ出版 (6)『長崎迷宮旅暦』1680円・書肆侃侃房 (7)『彷彿月刊 No. 276』735円・彷徨舎 (8)『数独攻略ガイド』420円・ニコリ (9)『ケアプラン文例集』1680円・瀬谷出版 (10)『図解 肥田式簡易強健術』1260円・壮神社

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
<http://www.bekkoame.ne.jp/~much/>

トピックス ——— ★★★

▼廃村と過疎の風景

今号の一面記事とも関連があると思うのですが、かつて書肆アクセスで販売していた、現在はセンターで直接取引書店向けに取扱っている『廃村と過疎の風景』(HEYANEKO 刊1, 2巻あり)という本があります。全国各地の廃村や集落跡を廻り、その旅の記録を本にしたもので、著者の浅原昭生さんは、廃村めぐりという風か変わった趣味が注目され、NHK BS hiの『熱中時間』や民放の『徳光和夫の感動再会“逢いたい”』などに出演したことがあります。普段は、センターのあるここ牛込神楽坂近くの有名出版社に勤めている方ですが、国立国会図書館で探した資料などをもとに廃村になった集落の見当をつけ、長期休暇を利用して、愛用のオフロードバイクで出かけるのだから、夢は全都道府県制覇で近々3巻目を出したいということでした。


▼ブックファースト新宿店がオープン

昨年ビルオーナーの事情により旗艦店の渋谷店が閉店したブックファーストですが、11月6日に、新たな旗艦店となる新宿店がオープンすることになりました。新宿駅西口で建築を進めていたモード学園コクーンタワーのB2F、B1F、1Fの1090坪に入居する予定で、センターは直接取引。歴史書フロアの位置に地方出版コーナーが、1400冊と小規模ですが常設されることになっていて、この内60～70%ほどがセンター出荷本となる予定です。地方史と民俗関連書が中心の品揃えとなります。

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先(郵便番号、住所)、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
 - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。(メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。)お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
 - ◎なお書籍お買上総計(税抜き価格)が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
 FAX：03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
 TEL. 03-3233-3312(代)
 URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

**営業の
ごあんない**

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

